

自蹊庵便り

令和七年 霜月

NO 177

茶事折々 〱茶事の妙味〱

妙味という言葉が好きで、良く使います。滋味に富んでいるとか、独特の魅力や味味あるようなときに…。清い味わい深い季節の料理にも良く使います。では、茶事の妙味とは一服の妙味とは…。

それは千回以上茶事をやり続けてみて、八十余歳のこの頃特に心に響くものがあります。

灰のぬくもり具合で炭の持ちようの妙味、炉にいたれば湿し灰の蒔きようで、炭の移りゆく妙味、露地ならばその日の天気次第による水の蒔きようの妙味。席中の道具の妙味。台所にては御飯の炊きようの最初の一口の妙味、二飯目、三飯目の絶妙さ。汁には汁の世界ありて、白味噌と桜味噌の合わせ具合の妙味、一日として同じ日のなきことを思い知らされるのも一汁三菜にいうところの一汁にございます。

茶事においてメインディッシュとも云われる煮

物椀には、今日この日ならではの季がぎゅっと詰まった椀種と吸地の当りの妙味等々、一瞬一瞬が妙味に尽きる、これが茶事というものの世界ではないでしょうか。

茶事という世界に与えられている季節と呼応した幸せ時間にございます。日本という季節の喜びをみださない働きをしたいと願いつつ茶事の日々にございます。

この原稿を書いているときにテレビから聴こえてきた言葉「百歳まで生きてても時間が足りないんだよ…」と、思わず顔を上げてテレビに映る人の顔を見てしまいました。あゝ…同じ事を思っている人もおられるのだ…と。

残生いかにばかりのものかは神様におまかせずるとしても、いよいよタイムリミットの心地にございます。歴史、道具、古筆どれ一つとつても、百歳まで問い続けるとしても、とうに二十年を割つてしまいました。

先人の声を聴く力、自らの粗末さとの戦い、これだけは戦いにございます。すべからず判断力、知力共々、内なる自分との戦いにございます。

なれど、楽しく戦うことにしております。自らの持ち合わせ少なきがゆえに、何事も楽しむことにいたしております。自分で自分をいじめてしまつては、更に持ち合わせ乏しくなりますので、生まれもった粗末さをも楽しむことができる よわい 年齢に至ったということにございましょう。

自分を傷だらけにしてまで修行してはならない…と、若い板前さん達にもよく言っている言葉です。楽しく優しい時間が共有できますよう、皆様と手を携え、心を一つにして、一会の場数を精進いたしておりますが、極上の一席の時間を共に築き上げて茶事という作品、一期一会の舞台の作品にございます。

茶事の妙味、それは刻一刻と移りゆく時の一瞬一瞬の命を掬い取ることの誠実さは必要にございますが、それらの営みは優しい波動に包まれた時の移ろいでありたいと思うのです。

わが師に三十年ほど前に、「お茶とは、一言で云うとしたら何でございましょう」とお尋ねしたことがございます。

師いわく「白露だよ」と一言、それ以来白露の意味をずっと考え続けてきて、露地、丁度今頃長かった夏からようやく秋への移り逝く時期に草木に宿る露が白く見える様子、これは二十四節気の九月の中頃の白露ですが、いつのときも晴れた日なれば、朝の光に白く輝く露を見ることができ、しらゆいという呼び名のほうが、一瞬に消え入る露のはかなさに心を遊ばせやすく思えるのです。それは悠久の世界から一瞬のまばたきするほどの人間の一生にも思え、それでいて何処にもふりそそぐ平等の世界をもきづかされ、権力の中で生まれた茶の湯であつたればこそその白露地であつたのでございましょう。

残生いかばかりかは計りかねますが、季節の喜びをみださない心働きをしっかりと！

心を打ち込んで茶事三昧の残生でありたいと…。

朝の白露をまとった草々の余りにも美しく、むしり採るのもひるむこの頃にございます。

あさつゆは いずこにも落ちて

秋萩の こぼるる庭に

しばしとどまる

対馬鎮魂茶事 雑感後編

あれから二ヶ月が過ぎようとしています。只今思い返してみしても、皆様お怪我もなくよく御無事でお帰りになったこと…と、奇跡に近いほど手際よく御帰宅なされておられます。

それでも京都のN氏御夫妻は宿がとれず駅の構内で朝六時まで過ごすことに、ある御夫婦はタクシーでおろされてから膝まで

水につかりながら目的地まで歩かれたとか、無事とはいいながらも、後日の皆様の御報告にはっと胸をなでおろしております。

改めて、皆様方の温かい御理解と御協力に感謝申し上げます。

只今は、飛行機のキャンセル料などの返金手続きの会計報告のための資料作りに追われております。十一月の教室の折には御報告と共に返金できますよう勧めておりますので、今少しの猶予を宜しくお願い申し上げます。

亭主といたしましては食材の手配の不備による残機に耐えない反省多き茶事でしたが、一言で云えば楽しかった対馬茶事でございました。それは偏に皆様の御支援あつてのことでございます。裏方お勤めくださった皆様始め、御参加の皆様、対馬でお世話になったすべての皆様に改めて感謝と共に厚く御礼申し上げます。

深謝